# 介護に配慮した住空間改善に関する研究
# －A study of the living space for accessible housing－
## －特別養護老人ホームの居住・介護環境評価項目の抽出－
## －Development of nursing home evaluation method－

**田中　大**
**TANAKA Hiroshi**

**Keywords：**
nursing home, Evaluation Grid Method

**Abstract：**
The purpose of this nursing home research is to get the evaluation items. Accordingly, the Evaluation Grid Method was used for the interview to the nursing home staffs. With all this, we could get some evaluation items. In the future, the basis of the results will be using the Conjoint Analyze for the next study.

### 1. はじめに

#### （1） 要旨

本研究は、特別養護老人ホーム（以下特養と略）の評価項目を得ることを目的としたものである。特養は専門的な介護が行われる空間であることを考慮し、そこで勤務する職員（ケアワーカー・看護婦）にインタビュー調査を行い、着眼点及び要求・要望を聴き取った。

職員へのインタビューでは、小さなカードにいくつかの特養を列挙してもらい、それらを10点満点で評価してから、評価グリッド法を用いて評価項目の抽出とラダーリングを行った。

#### （2） 社会的背景

特養の計画の是非は施設建物といういわゆるハード面よりむしろソフト面の条件に大きく左右されるものであり、それゆえその計画の際の条件は多岐にわたり複雑である。

近年の特養などの施設計画を見ると、居室の個室化、グループホーム化などの傾向が強まっている。これはこれまでともすればなおざりにされがちだった入居者のプライバシーや尊厳の重視によるものである。また、内装に木質系の素材を多用したり白熱球による照明を増やすなど、より家庭的な雰囲気を演出することで「脱・施設化」を図るなどの特徴も多く見られる。

このような流れの中で近年多くの特養などの施設が建設・計画されているが、その評価（計画）の条件に対しては、具体的な項目を設定するのが難しいと思われる。したがって、客観的な判断基準を用意することは事業主体や計画者のみならず、入居者や利用者の利益にも貢献すると思われることから、今回の調査・研究を行った。

### 2. 方法

#### （1） 手法の整理

社会現象や市場の動向を知ろうとする場合、近年様々な調査方法が開発され適用されている。いずれの調査でも、問題としている現象に関する要因を整理し、その要素間の関係性を求めようとするものであり、前者は構造同定、後者はパラメーター同定と呼ばれている。構造同定（要因の抽出・整理）においては、KJ法やブレーンストーミングなどの方法や、重回帰分析・因子分析・クラスター分析・数量化理論などの多変量解析の方法などが挙げられる。KJ法などの場合では、聴き取り調査で得た内容を複数の専門家の検討によって分類することが必須となる。また多変量解析の場合では、そのもととなるデータは存在することが前提であり、どのような内容を聞くのか、どのようなデータを用いるのかといった段階からの検討が必要で、そのデータ（要因）そのものを見出そうとするものではない。

今回の調査で用いた評価グリッド法（旧レパートリー・グリッド発展手法）は、臨床心理学者G.A.Kellyが開発した面接調査法であるレパートリー・グリッド法を改良したもので、コンセプトの抽出・開発、認知構造の階層的なメカニズムの把握に適した方法といわれている。またこの方法では、インタビュアーが主観的な判断を交えずに面接を進めると

いう手順を取るため、自由回答形式の調査でありながらインタビュアーが異なっても安定した回答を抽出できるとされていることから、この手法を採用する事とした。

### （2） 調査の概要

今回の調査は特養の評価項目の把握が目的であるため、日常実際に特養で勤務している職員の方に御協力いただき調査を進めた。調査は個人面接方式とし、はじめに記憶に残っている施設をポストイットカードにひとつずつ記入していただき、10段階に分けた用紙（最上位は“理想の施設”とし、予めこちらで記入）にそれらを並べていただいた。そしてそれをもとに上位グループと下位グループを比較しながら相違点をつかみ、その相違点の上位項目と下位項目をラダーリングによって把握した。最後に理想的な施設と現状とを比較して項目を補足した。調査の概要は下記の通りである。

| | |
|---|---|
| 日　時 | 2000年1月15日、2月25日、2月28日 |
| 場　所 | 兵庫県内の特養２施設（AおよびB施設） |
| 被験者 | （A）ケアワーカー６名、看護婦１名<br>（B）ケアワーカー５名 |
| 調査方法 | 評価グリッド法（個人面接調査、各30分程度）<br>① 記憶に残っている施設の列挙<br>② 上記施設の10段階評価<br>③ 上位グループと下位グループの比較による相違点の抽出<br>④ 上記相違点の上位項目と下位項目の把握<br>⑤ 理想的な施設と現状の比較 |

## 3. 結果

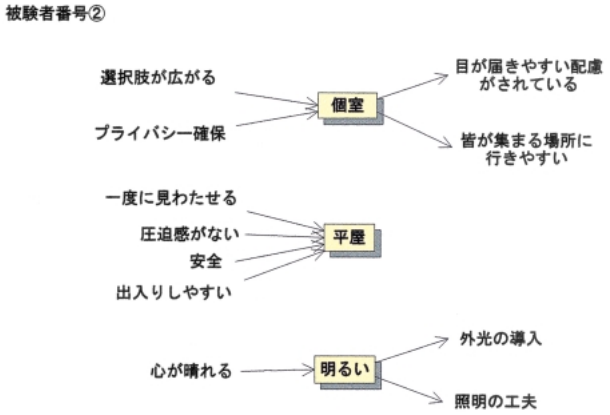
### 3－1.　A施設について

### （1） 職員の着眼点の調査

① 個人別ネットワーク図

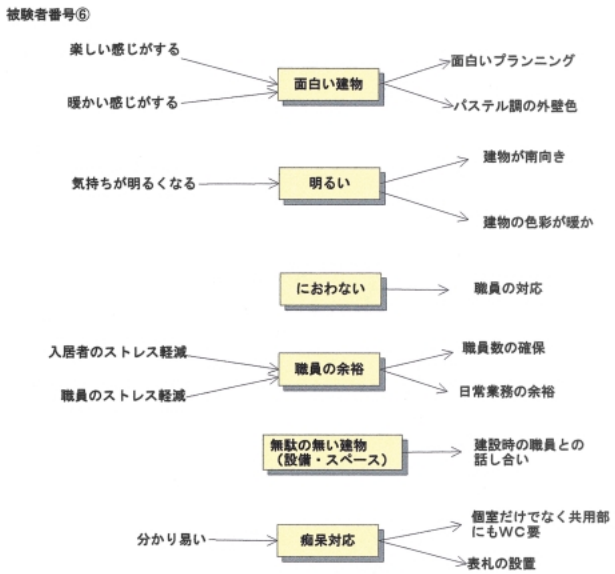
評価グリッド法の手法に即して、施設評価の着眼点について個人別にネットワーク図を作成した。その例が（図－1，2）の2例である。これらは、オリジナルコンテクストとして得られた項目を中央付近に、その左右にラダーリングで得られた項目を配置した図である。

被験者②の場合、施設評価時の着眼点として、「個室」（目が届きやすい配慮がされている、皆が集まる場所に行きやすい）、「平屋」、「明るい」（外光の導入、照明の工夫）を挙げている。なお（　）内はラダーリングで得た下位項目である。各オリジナルコンテクストの上位項目としては、プライバシーや安全性、快適性などが挙げられている。




図－1

被験者⑥の着眼点として「面白い建物」（プランニング、外壁色）、「明るい」（南面、色彩）、「におわない」（職員の対応）、「職員の余裕」（職員数・業務の余裕）、「無駄の無い建物」（建設時の話し合い）、「痴呆対応」（共用WC、表札の設置）などをあげており、それらの上位項目として明るさ、楽しさ、ストレスが無いなどを挙げている。

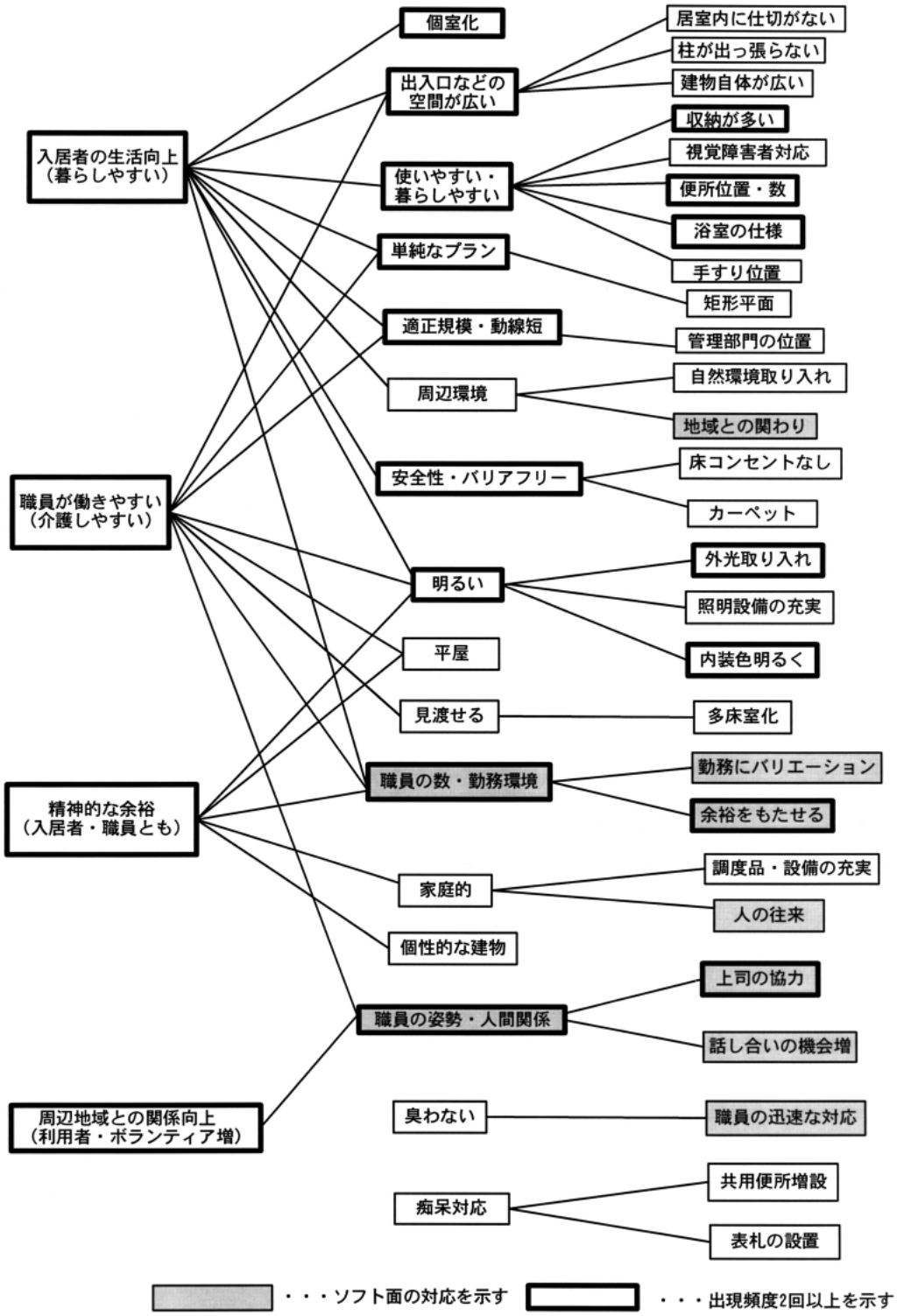



図－2

被験者全体として、施設評価時の主たる着眼点は、多分に情緒的・感覚的なものを優先させるべきと考えていること、そしてそれらが職員のためと言うよりは、むしろ入居者の生活向上のために挙げられているということが共通点として見られる。

② 全体のネットワーク図

７名の調査結果から、類似性の高いものを一項目にまとめ、全体のネットワーク図を作成したのが（図－3）である。おおまかには右側に近いほど特養施設のハード面の条件、左側に近い項目は心理的な影




**図－3**

響やそれから得られると思われる効果を示している。この図から、介護職員の目から見た特養の目標となる内容は、次の４つの大きな系列に分けることができる。

＜入居者の生活向上＞

「プライバシー確保」「選択肢が広がる」「安全」「分かりやすい」などの項目をまとめたものがこれにあたる。「個室化」「空間の広さ」「バリアフリー化」等の到達度によって、当然入居者の居住環境は大きく左右され、施設ハード面の対応の影響を大きく受けるということが分かる。

＜職員が働きやすい＞

「入居者の状況がつかみやすい」「介護しやすい」などの項目をまとめたもの。「動線が短かい」といったハード面の対応の影響とともに、「職員数」や「業務の余裕」などのソフト面の影響も同様に多いことが見て取れる。これは、後述のＢ施設の被験者の場合では見られなかった項目で、職員配置の違いがその着眼点に影響しているのではないかと思われる。現施設について、現状では多岐にわたる業務内容に対して職員数が不足しているとの意見が多くきかれ、その面での充実がひいては上記項目の「入居者の生活向上」につながるものと言える。

＜精神的な余裕＞

「気分が明るくなる」「なごむ」「楽しい」などをまとめたもの。ここで比較的大きな影響を与えているのが、建物が文字通り「明るい」ということであり、「建物の向きの工夫」や「窓」の効果的な配置によって直接的に自然光を導入することが切実に求められていることがわかる。

＜周辺地域との関係向上＞

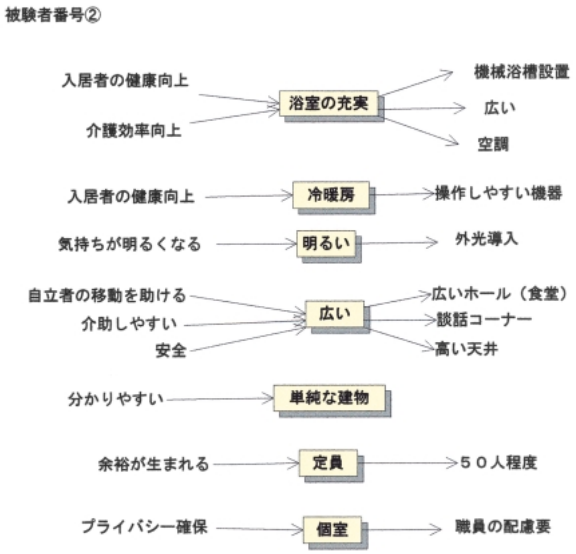
将来の「利用者増につながる」、「ボランティアに参加してくれる人が増える」といった効果があると考えられる項目で、これには施設で働く「職員の対応や姿勢」が影響を与えると考えられている。「明るく」「楽しく」職員が働いている姿を周辺の住民が見ることで、結果的に好印象を与えることができるという見方であろう。

### ３－２．Ｂ施設について

① 個人別ネットワーク図

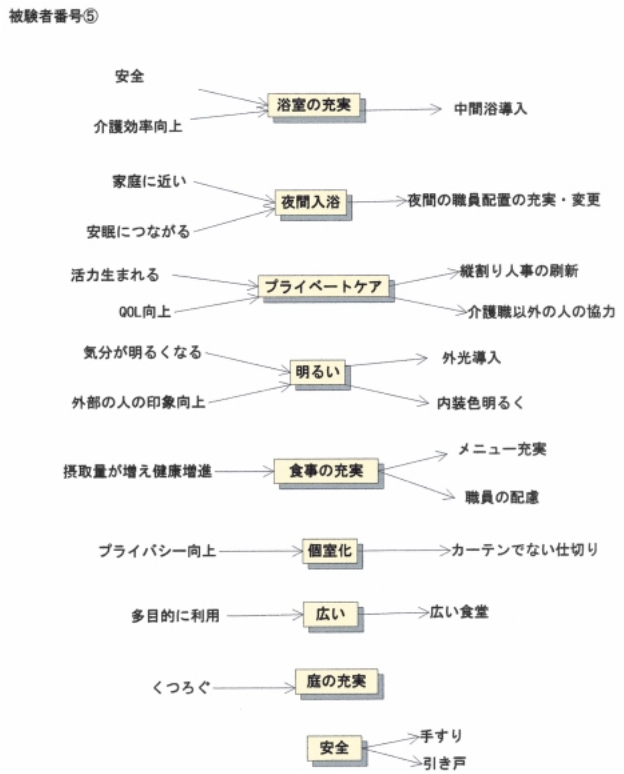
Ａ施設と比較して特徴的であったのは、各被験者が挙げた評価項目の多さである。オリジナル項目は平均９項目（Ａ施設では約５項目）であった。Ａ施設の場合と同様に個人別のネットワーク図の例を次に挙げる（図－４、5）。

被験者②の場合、「浴室の充実」（機械浴槽設置、広い、空調）、「冷暖房」（操作しやすい機器）、「明るい」（外光導入）など７つのオリジナル項目を挙げていて、それらの上位項目として入居者の健康向上、介護効率向上、気持ちが明るくなるなどを挙げていた。




図－４

被験者⑤の場合もこれに類似したものであるが、特徴的なのは「夜間入浴」（夜間の職員配置の充実・変更）、「プライベートケア」（縦割り人事の刷新、介護職以外の人の協力）等が挙げられている点である。これらの上位項目にはやはり、家庭に近い、安眠、QOL 向上など、他の被験者に類似した項目が挙げられていた。




**図－5**

② 全体のネットワーク図

B 施設の被験者の場合でも、A 施設同様に施設の目標となる内容は大きく 4 つの系列に分類できる。先に触れたように、B 施設では調査時に挙げられた評価項目がかなりの数に上っており、その大半は入居者の生活向上という系列に集中していることが見て取れる（図―6）。

＜入居者の生活向上＞

多くの着眼点がこの系列に属しており、その中でも多いのは冷暖房、広さ、浴室充実などのハード面についてである。これは B 施設が開設されてからかなりの年月が経っており、建物の老朽化、窮屈さを日常的に体験している職員に特徴的な着眼点だと思われる。A 施設の被験者がどちらかと言えば施設の全体像を念頭において理想を挙げているのに対し、より具体的に各室、設備に注目している事からもそのことがうかがえる。

＜職員が働きやすい＞

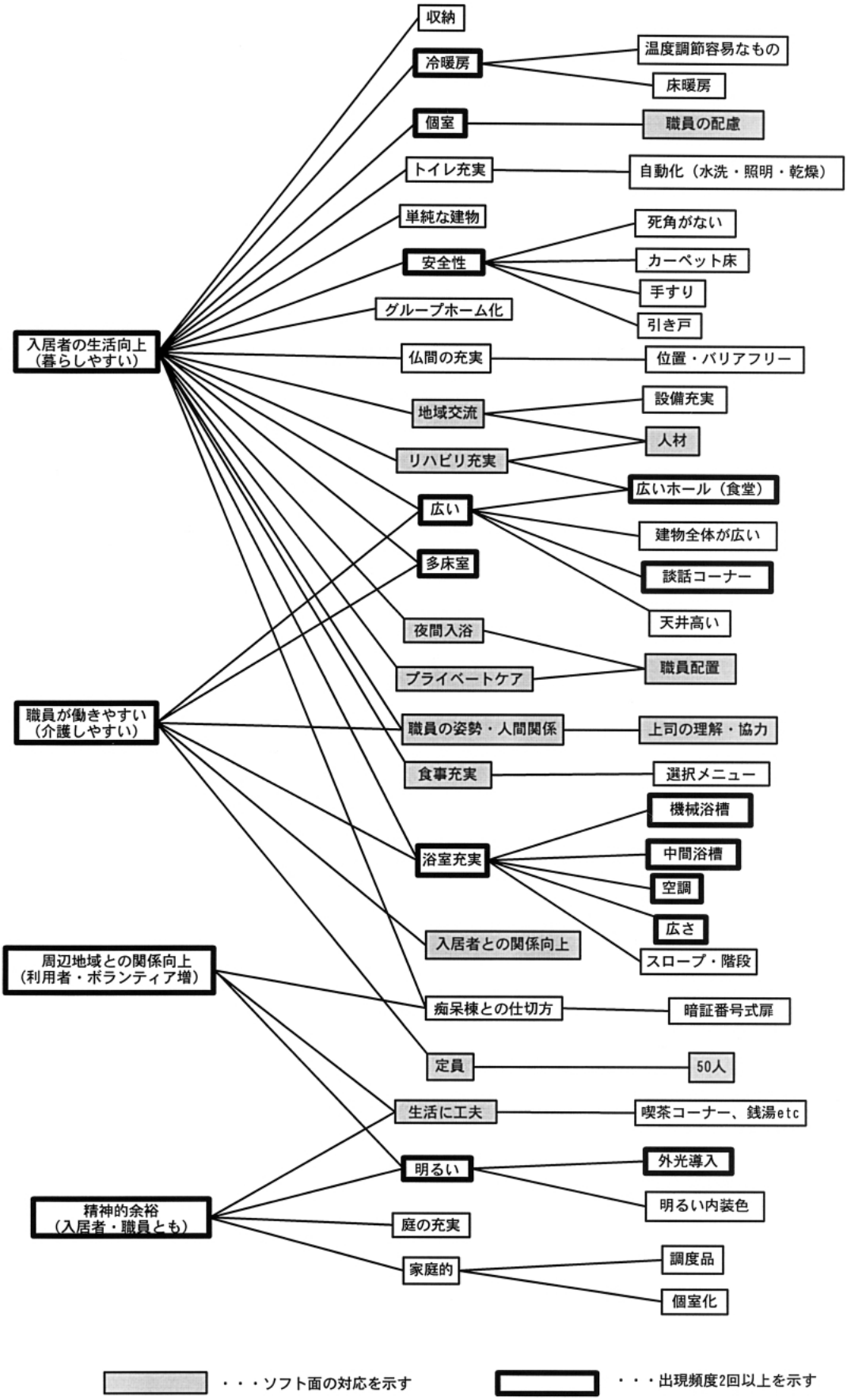
各被験者が共通して挙げていた「介助（介護）しやすい」という項目をまとめたものである。職員の姿勢や人間関係といったソフト面の影響も見られるが、前項目同様広さや浴室の充実などハード面に関する着眼点の影響が圧倒的に大きいのが特徴的である。

＜精神的な余裕＞

落ち着く、気持ちが明るくなる、くつろぐなどをまとめた系列である。際立って影響しているとは言いがたいが、ここでも A 施設の場合と同じく「明るい」という項目の影響が見て取れる。

＜周辺地域との関係向上＞

外部の人の印象向上、見た目が良いなどをまとめた系列。明るい空間で面白いプログラムが実施されていれば、周辺地域の人達にも親しめる施設になるというものである。A 施設の被験者の場合でもそうであったが、この項目を挙げた被験者は予想していたより少なかった。


入居者の生活向上
（暮らしやすい）
職員が働きやすい
（介護しやすい）
周辺地域との関係向上
（利用者・ボランティア増）
精神的余裕
（入居者・職員とも）
収納
冷暖房
温度調節容易なもの
床暖房
個室
職員の配慮
トイレ充実
自動化（水洗・照明・乾燥）
単純な建物
安全性
死角がない
カーペット床
手すり
引き戸
グループホーム化
仏間の充実
位置・バリアフリー
地域交流
設備充実
人材
リハビリ充実
広い
広いホール（食堂）
建物全体が広い
談話コーナー
天井高い
多床室
夜間入浴
職員配置
プライベートケア
職員の姿勢・人間関係
上司の理解・協力
食事充実
選択メニュー
浴室充実
機械浴槽
中間浴槽
空調
広さ
スロープ・階段
入居者との関係向上
痴呆棟との仕切方
暗証番号式扉
定員
50人
生活に工夫
喫茶コーナー、銭湯etc
明るい
外光導入
明るい内装色
庭の充実
家庭的
調度品
個室化
・・・ソフト面の対応を示す
・・・出現頻度2回以上を示す

図－6

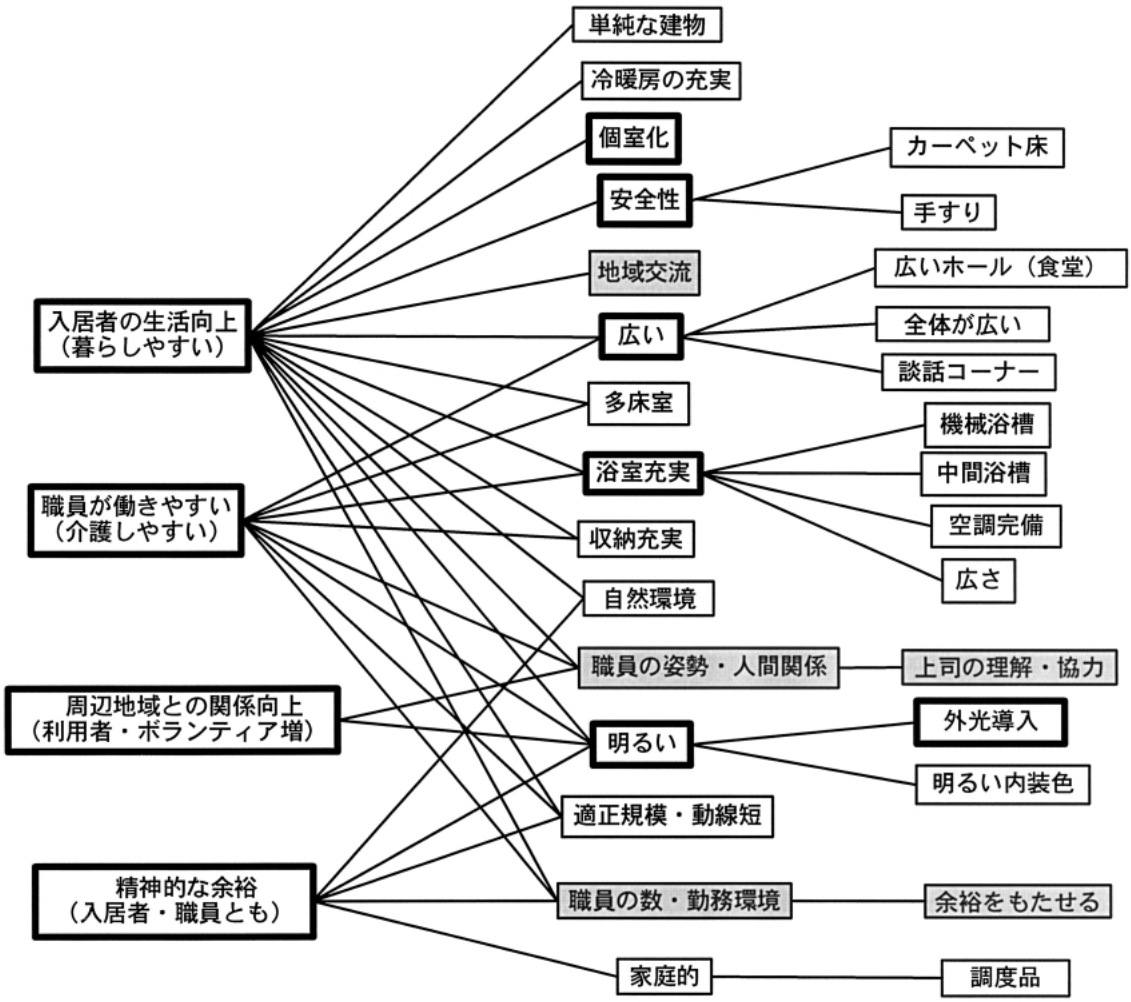
### ３－３．両結果を統合したネットワーク図

両施設合計 12 名の挙げた評価項目をもとに、これまでと同様の手法で全体を統合したネットワーク図を作成したのが（図－7）である。

この図では、被験者各人が挙げた評価項目のうち、出現頻度が 2 回以上のものを採用した。また、太枠で囲った項目は出現頻度 4 回以上の項目である。

評価項目として多かったのは「個室化」「安全性」「広い」「浴室充実」「明るい」といったハード面に関する項目で、いずれも「入居者の生活向上」という上位項目につながるものであった。

この中で「明るい」という評価項目は 4 つの上位項目の系列全てに影響するものと考えられており、特養施設での「明るさ」の重視がうかがえる。




※出現頻度２回以上のものを対象として作成

・・・ソフト面の対応を示す　・・・出現頻度４回以上を示す

**図－7**

また「浴室充実」という評価項目も大きな影響力を持つものであるが、これはB施設の職員に対する調査で集中して挙げられたもので、A施設ではなかったことに注意を要する。同様にB施設のみで挙げられた項目で「冷暖房の充実」「トイレの充実」等が挙がっていることから、これらとまとめて「設備の充実」という項目に整理する事も可能である。

そして今日主流となってきている「個室化」はプライバシー確保などの面で「入居者の生活向上」に直接つながると考えられているが、「職員が働きやすい（介護しやすい）」という項目にはつながっていないのも注目できる。

「広さ」「安全性」についての指摘も多い。「広さ」では建物全体が広いことは当然として、食事や様々な催しものなどの際集まれる広い空間が必要とされていること、「安全性」についてはバリアフリーの徹底、手すりの設置などの条件が挙げられた。

それほど多くはなかったが「広さ」にある意味では相反する意味を持つ「適正規模・動線短」という項目も見られた。しかし、これは建物が新しく広いA施設の職員に対する調査で見られたもので、老朽化が進んだB施設では皆無でもっぱら「広さ」を求める意見に偏っていたことが興味深い。

## 4．考察・今後の展開

### （1）主要な項目の詳細

上記の「個室化」「安全性」「広い」「設備充実」「明るい」という5項目について再度具体的に見なおすことする。

＜個室化＞

「個室化」といわれるときには、いわゆる「個室」の設置よりも広い意味を持つ。ケアワーカーの一人が言っていたように「多床室でもカーテンで仕切るのではなく、最低限障子などの固定的なもので仕切る」というような方法も含まれる。ただ、このようなハード面での配慮という指摘でとどまっていた職員はむしろ少なく、単に個室を作るだけでなく「みんなが集まる場所に行きやすい」位置に居室（個室）を配置すること、そして各入居者の行動を実現するために「寝たきりにさせない」配慮が必要であるとの指摘が多い。

＜安全性＞

建物のバリアフリー化はこの種の施設の場合当然で、段差が無く手すりが設置されているなどの条件はその意味で必須と言える。「安全」を実現するには、このように直接的な条件だけでない。ある職員はこの「安全性」に関わる項目として「収納空間の充実」を挙げている。これは収納空間が不足している場合、収まりきらなかった物が廊下等にあふれ、結局狭くなったり手すりをふさいだりという状況を生み、安全性に影響を与えることを示している。また、2階以上に痴呆棟（部門）を設けエレベーターを設置する場合には、誤操作や徘徊を防止する意味で「カゴ内の操作パネルを暗証番号式にする」などの配慮も役立つという意見もあった。

＜広い＞

建物の広さを要望するということの中には、「必要・有益な空間を必要なだけ欲しい」という意味がある。このことは「適正規模・動線短」にもつながるといえる。具体的には居室を広くすることや、地域の人達も招いて行事が行えるような「広いホール（食堂）」が必要とされている。またこのようなまとまった空間のほかに、仲の良い入居者が気軽に集まれる小さな「談話コーナー」をあちこちに配置できるような建物の広さが必要だということも挙げられた。

＜設備充実＞

「機械浴槽の設置」「浴室・脱衣室の空調完備」「館内・居室内の空調の操作性」「トイレの自動化」などのハード面での要望である。先にも触れたように、この項目は現状では設備が不足していると思われるB施設の職員が挙げた着眼点であり、日常業務の不便さがあらわれた結果で、その充実が望まれていると思われる。

＜明るい＞

今回の調査の中で特に挙げられることが多かった評価項目であるが、建物が新しいA施設の職員の方がこの項目を挙げることが多かったのが興味深い。照明設備による明るさの確保より、最低限主要な室を南面させるなどで積極的に自然光を取り入れ、その上で内装色を明るくすることなどで、より明るさを確保することが望まれている。また、南向きの明るい場所にいる入居者の方が、自然光のが乏しい場所にいる入居者より動きが活発だという興味深い意見も聞かれた。

### （2） 今後の展開

以上のように特養には大きく分けて4つの目的があり、それに対し5つの評価項目（計画目標）があることが分かった。今後はこれらをもとにして特養

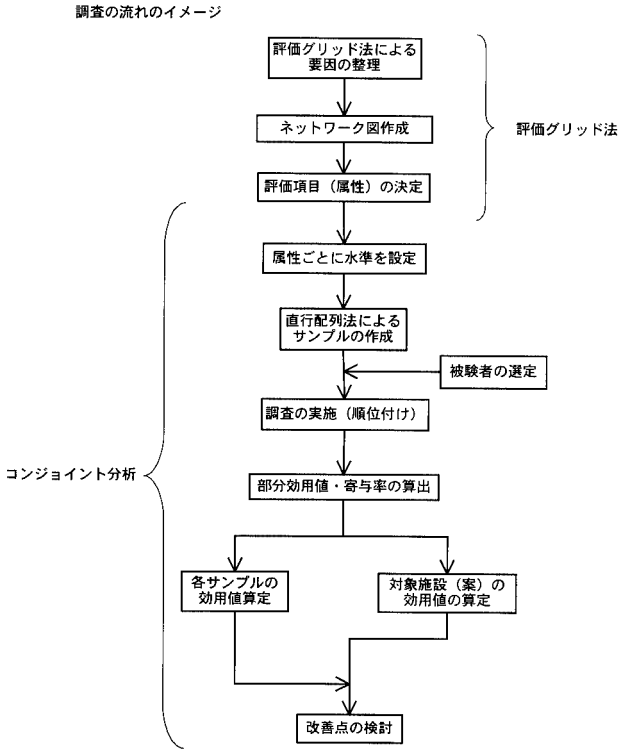
施設に対してコンジョイント分析という調査を引き続き行いたいと考えている。

コンジョイント分析は、1960年代にアメリカで開発された調査法で、主として産業界・マーケティングリサーチの世界で用いられている。

ある商品の開発を例に簡単に考えてみる。企画段階では、まずその商品のコンセプト（構成）について、「大きさ」「性能」「デザイン」「価格」など様々な要素・評価項目が挙げられる。これらの中でそれぞれの項目ごとに最適なレベルを選択し（「A4サイズ」「高速」など）、それらを組み合わせることで商品がつくられる。企画段階で消費者（利用者）の意見を聞くことはしばしば行われ、その際これらの項目についてそれぞれ要望を聞くことが多い。このように個々の項目ごとに要望をきく場合、えてして、「コンパクトサイズ」「超高性能」「優れたデザイン」「低価格」というような結果が出がちで、わざわざ調査するまでもない内容になることが懸念される。この危険性を回避できるのがコンジョイント分析であるといわれている。

人がある商品を選ぶ場合、単に価格が安ければ買うとか、性能が良ければどんなに高価でも買うというわけではなく、「この機能が付いた商品なら、もう少し価格が高くてもこちらを買う」といったように、複雑なバランスを取りながら選択を行うものである。コンジョイント分析はこのような行動がシミュレートできる手法で、いわゆる“商品”以外では集合住宅やリゾート施設の企画・計画などで既にコンジョイント分析が実施された例がある。

今回の調査で得た項目の全てが実現されたような施設が理想的であることは言うまでもないが、残念ながら様々な制約により現状ではそれは困難なことが多い。その中で、どの条件（項目）をより重視すれば、最も効果的に働くのかを把握することが、少しでも理想に近く無駄のない施設の実現に近づく役に立つのではないか。たとえば、施設計画の際、敷地などの与条件は変更不可能な場合が多く、その条件下で「全室個室」とするためにはある部分の「広さ」か「明るさ」のどちらかを犠牲にしなくてはならないといった心苦しい場面はよくある。理想としてはその全てを実現できる計画地を再検討すべきなのだろうが、前述のようにそのような選択はできない場合が圧倒的に多い。その際この「明るさ」「広さ」のどちらを優先して検討を進めるべきなのかという判断をするときにコンジョイント分析で得られた結果を生かすことができると思われる。




**（参考文献）**


・「環境心理研究の適用事例集」（日本建築学会環境工学委員会編）

・「マーケティング・リサーチの計画と実際」（二木宏二・浅野熙彦、日刊工業新聞社）